V　寺院の調査

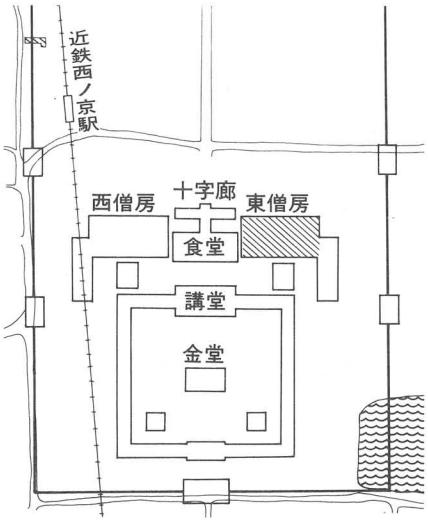
①　薬師寺境内の調査

発掘調査は東僧房の再建工事に先立ち、その復原資料を得ることを目的として行なった。

薬師寺東僧房については昭和45年に薬師寺発掘調査団（団長杉山信三氏）が基壇南縁の全長55ｍと第１房を明らかにし、東僧房の位置・規模および房の各間取がほぼ確定している。今回はその発掘区を含めて大房第１房から第９房までの東西棟の全面発掘を行なった。ただし東僧房のまわりには集水管がめぐらされており、東僧房の雨落溝を含め広く調査することができないため建物の部分のみ調査を行なった。

東僧房付近の地山は灰色粘質土で、西側は一部砂質土である。この付近は昭和のはじめ頃まで水田であり、耕作土・床土の下には黄色褐色土がある。耕作土の上には薬師寺境内の整地による盛土が厚さ70㎝近くある。

遺構の保存状態は第１房と第２房は良好で、第３房以東はきわめて悪い。礎石はすべて抜きとられ、基壇上面は削平を受け、さらに平安末から中世にかけての大きな土坑がある。特に第７～９房には土坑が多数あり、基壇はほとんど残らない。第７房の南北溝は近世以降のもの、第９房の南北溝は中世の溝である。このような後世の破壊にもかかわらず、礎石据付掘形・根石・地覆石抜き取り痕跡により、大房第１房から第６房までが明らかになった。



第18図　発掘位置図

大房の基壇は砂質土と粘質土を互層に約60㎝積んでいる。基壇南端には人頭大の玉石や玉石抜取り痕跡の残存から、基壇は玉石数個を積み上げた玉石積基壇となろう。しかし大房基壇北端には葛石はない。南側基壇の出は南側柱心か

ら2.1 mである。第7房の南の調査では、南側の雨落溝は南岸も玉石積みで幅1.2 m、深さ0.4 mである。

この基壇上で東西に並ぶ礎石据付掘形を検出し、東僧房は東西に長い建物で、各房はそれぞれ間仕切られていることが判明した。

各房の房境柱の礎石据付掘形は方形で一辺が約1.5 m、深さが最も深い第1房北西の掘形で約0.6 mある。第1房の礎石据付掘形の底には瓦を敷いている。特に妻柱の礎石据付掘形からは瓦が多量に出土した。これに対して部屋の内部を間仕切る柱の礎石据付掘形は方形で一辺が1 m、深さ約0.2 mでやや小さい。方立柱礎石据付掘形は円形で直径0.6 m、深さ約0.2 mである。一方大房北側の建物の南側柱礎石据付掘形は方形で一辺約1 m、深さ0.3 mである。

大房（第1房から第9房）は東西に長い建物で食堂と棟心をそろえ、西僧房とほぼ対称の位置に配置している。大房一房分の規模は梁行が4間（9尺＋10尺＋10尺＋9尺）、桁行が2間（10尺＋10尺）であり、隣りの房とは壁で仕切っている。各房は梁行20尺の身舎と前後9尺の庇部分からなり、大きく前・中・後の3室に分けられる。内部は土間床である。第1・第2房の正面には凝灰岩の地覆石が20尺の間口を引通しており、中間に礎石据付掘形は存在しない。地覆石の内側に接して中央部分7.5尺にわたって凝灰岩を並べており、両側に袖壁を設け、中央を開口部としていたらしい。最も保存状態のよい地覆石は長さ80㎝、幅15㎝、高さ17㎝である。外に面している地覆石の外面は上端から10㎝位までは風化が著しく、それ以下はあまり風化していないことより、約10㎝位は地上に出ていたことを示している。この地覆石は一部後の補修の際に小さな凝灰岩や花崗岩とさしかえている。中室の正面には礎石据付掘形が2個所にあり、3間にわりつけ、中央間を扉口としているらしい。背面には中央に礎石据付掘形があり、2間にわりつけており、西側には地覆に用いた瓦の抜取り痕跡、東側には中央より東7尺に円形の礎石据付掘形がある。この掘形は方立柱礎石据付用のものであると考えられることより、西の間は壁、東の間は東端3尺を壁、残り7尺を後室への扉口としているようである。第1・第2房の中室には西および東寄りにそれぞれ小さな穴が並

んでおり、この穴は束石の抜き取り痕跡と考えられる。この穴の一部は床が削平されたり、礎石が抜き取られた時になくなっているが、西僧房と同様に西側に床を東側に棚を設置していたのであろう。第３房以東は土間が削平されており、束石の配置は不明である。後室は２室に分けられ、東側は背面に扉口や壁の痕跡はなく、開放しとなっていたようである。

大房の北側柱心から2.4ｍ北には各房ごとに西側柱筋を大房の房境いにそろえた１間の礎石据付掘形がある。これは西僧房と同様に、南北棟（桁行３間－８尺等間。梁行１間、８尺）の付属屋南側柱位置にあたる。また付属屋の南側柱列にそろえて、その東側には浅い落ち込みがあるが、これもＬ字形石敷溝の南側の掘形にあたるであろう。

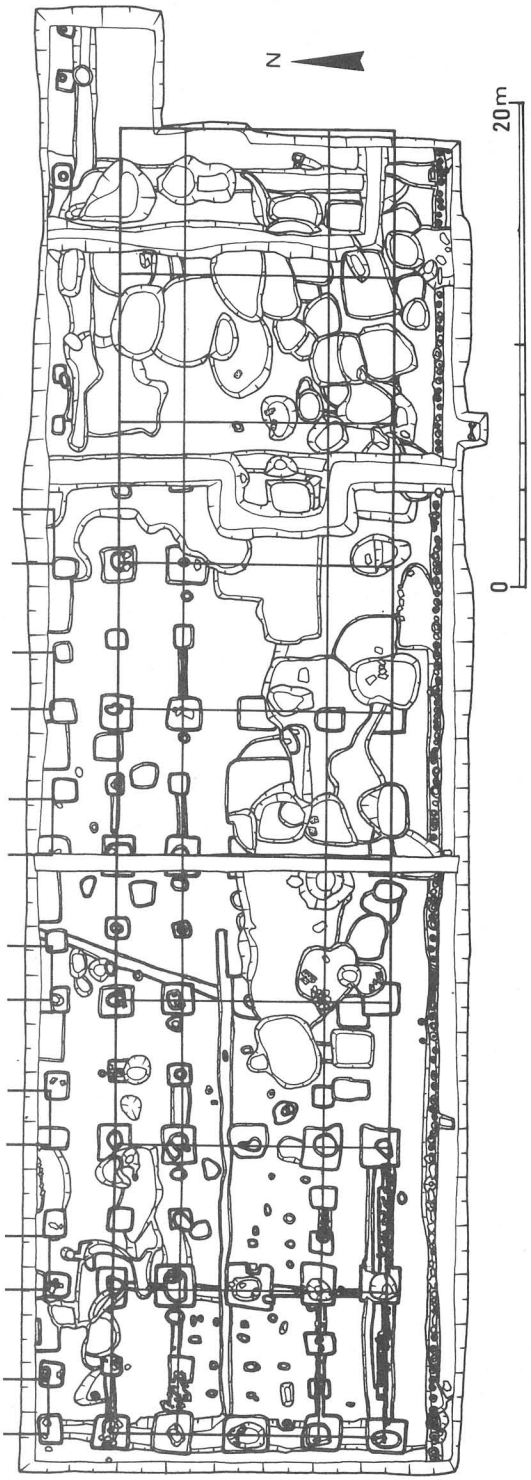
発掘区の中央部で基壇の築成法を調べたところ、この付属屋の南側柱礎石据付掘形の下層で素掘りの東西溝（幅0.8ｍ、深さ0.4ｍ）を検出し、さらに東西３個所でこの溝の続きを確認した。この東西溝から大房北側柱までの距離（2.1ｍ）は大房南側柱から南雨落溝までの距離とほぼ同じであり、またこの両溝の深さもほぼ同じであることより、この東西溝は大房の北雨落溝と考えられた。

以上の発掘調査の結果により、東僧房は西僧房と全く同じ規模・間取であり、各房は桁行20尺、梁行20尺の身舎と前後９尺の庇部分からなり、前・中・後の３室に分けられ、隣りの房とは壁で仕切られていること、また創建当初には付属屋は存在しなかったことが明らかとなった。東僧房創建の時期については、第１房の梁行側柱および房境いの柱の礎石据付掘形の底に敷いてあった新しい瓦（軒丸瓦6304－Ｅが１点、軒平瓦6664－Ｏが６点）は平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期にあたることから、養老５年から天平17年頃であろうと考えられる。一方東僧房の廃絶の時期については、昭和45年東僧房発掘調査において、第１房の土間は赤く焼けており、木炭・焼土が散乱していることより、東僧房は焼失したものと考えられた。また第１房の床面より土器が重なって焼け落ちた状態で出土しており、これらの土器の年代は10世紀後半頃と考えられるので、東僧房の焼失は長和４年（1015）に撰述された『薬師寺縁起』に記載されている天禄４年（973）の食殿堂童子宿

所からの出火による僧房焼失の記載とも矛盾しない。つまり東僧房は天禄４年に焼亡し、以後今回の発掘区においては再建されていないことが明らかとなった。

東僧房の遺構とは別に発掘区の北東で東僧房の焼亡後に掘られた掘立柱掘形を検出したが、その性格は今回の調査では明らかにすることができなかった。

出土遺物には瓦・土器・銭貨がある。瓦はおもに南雨落溝・土坑・礎石据付掘形の底から出土した。軒丸瓦は130点・軒平瓦は159点である。礎石据付掘形から出土した軒丸瓦は6276型式２点・6304－Ｅ型式９点で、軒平瓦は6641型式６点・6664－Ｏ型式１点・6682－Ａ型式１点である。この中で6276型式・6641・6682－Ａ型式は平城宮瓦編年第Ｉ期で、6304－Ｅ・6664－Ｏ型式は第Ⅱ期である。土坑中から出土した軒瓦には中世の瓦もいくつか含まれる。土器はおもに土坑中より出土した。特に第４房の大土坑からは200点にものぼる12世紀末の土師器皿や瓦器椀・皿が一括投棄された状態で出土した。この



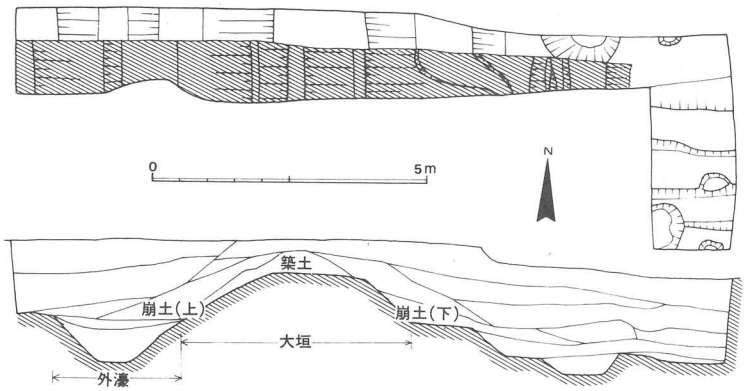
第19図　薬師寺東僧房発掘遺構図

他に須恵器が1点・緑釉陶器・灰釉陶器が2点出土している。第8房の土坑から青磁皿が1点出土した。銭貨は第6房の土坑から富寿神宝が5枚重なって出土した。

② 薬師寺西面大垣の調査（第118 −27次）

住宅新築に伴う事前調査である。当該地北方の竹藪などには築地の痕跡と思われる土壇状の高まりがところどころに残り、それらの延長線上にあたるところから、薬師寺の西面を画する大垣遺構の存在が想定された。設定したトレンチは、東西に長く（10× 2 m）、 東端で逆L字形に南へ3 m拡張した。

調査の結果、推定どおりの位置で築地大垣状遺構を検出した。大垣は地山を削り出した上にきめの細かな土をつき固めたもので、基壇幅5.25m、残存高1.3 m（うち地山のみの高さ0.75m）ある。大垣西外方には幅2.35m、深さ0.8 mの空堀が接する。東方は平坦面が続いていたものと思われるが、現状は幅1.1 mほどしか残らず、削平を受けている。平坦面の上に築地崩壊土が2層堆積していた。下層崩壊土の上面に雨落溝状の石だまりがあり、本薬師寺式の軒瓦・瓦器・羽釜などを含んでいた。下層崩壊土をならして用いた面の時期は中世に属する。大垣積み土内にも瓦器・羽釜片が含まれており、中世に大垣の修築がおこなわれたことが考えられる。



第20図　薬師寺西面大垣発掘遺構平面・断面図

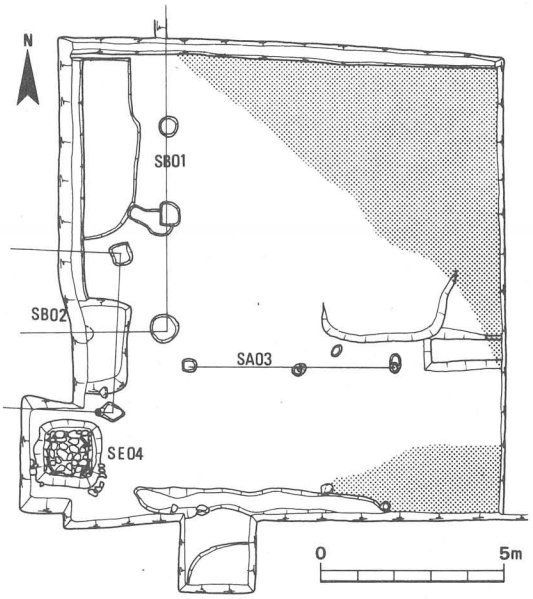
③　東大寺境内の調査１

東大寺学園体育館の改築に伴う事前調査である。調査地は、南大門を入ってすぐ西側にあり、南面築地に沿った地域である。調査は東西約37ｍ、南北約18ｍのトレンチを設置してすすめた。

調査地は現地表から約40㎝下までは盛土層である。トレンチの東$\frac{2}{3}$では、盛土層の下に人頭大から50㎝以上の大きさの石を含む礫層がある。礫層は、西$\frac{1}{3}$あたりより西方へいくに従い下がっていき、トレンチ西端での層序は、盛土層下に黒褐色包含土、暗褐色混礫土、黄褐色粘質砂土の順になっている。礫層の露出する東$\frac{2}{3}$には遺構はなく、西$\frac{1}{3}$の12×12.5ｍについて精査した。黒褐色包含土には瓦器が含まれるが、暗褐色混礫土中には含まれていなかった。暗褐色混礫土を除去し、黄褐色粘質砂土上面で遺構検出した。

検出した遺構は、掘立柱建物２棟、柵１、井戸１、土坑２ほかである。２棟の掘立柱建物は、いずれもトレンチ西寄りからはじまりトレンチ外へのびるもので、建物規模は不明である。２棟の建物の南に接して井戸がある。井戸は、一辺約1.８ｍの方形の掘 形をもつ。 深さは遺構面より1.８ｍで、20～30㎝大の河原石を敷き、その上に細バラスを５㎝程の厚さで敷いていた。側壁は方形の石組であったと思われるが、最下段の一段のみ辛うじて残っていた。四隅では、長さ50㎝、一辺５㎝の角材を斜にわたし、その上に側石をおいていた。

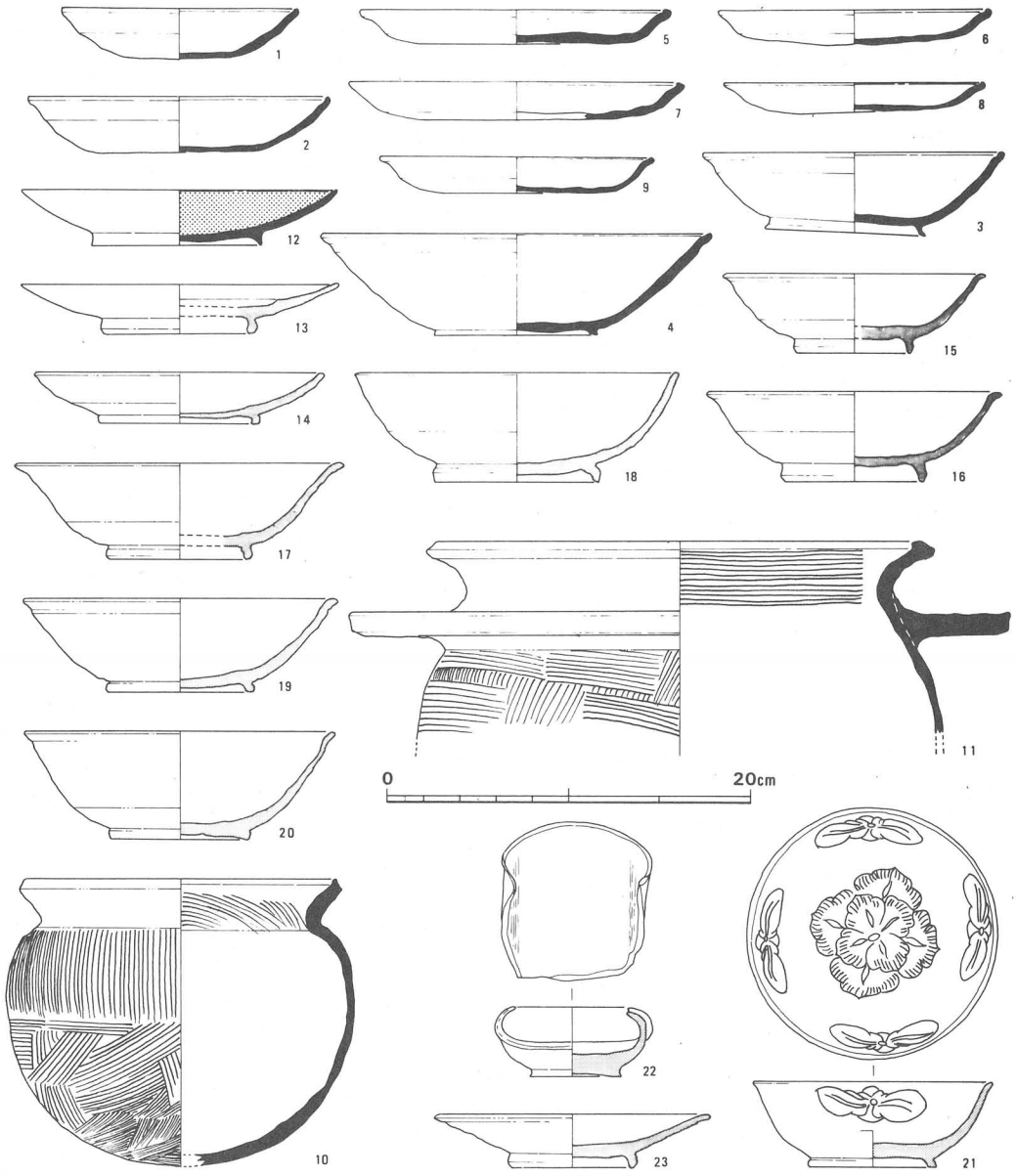
井戸は廃絶時に一気に埋められているが、上端から１ｍ下までの埋土には、多量の土器類が含まれていた(第19図)。土師器杯Ａ（１・２）、杯Ｂ（３・４）、皿Ａ（５～９）、甕Ａ（10）、羽釜（11）、黒色土器Ａ類皿（12）、Ｂ類硯、 須恵



第21図　東大寺西南院発掘遺構

器杯・壷、緑釉陶器椀（19・20）、灰釉陶器皿（13・14）、椀（15～18）などである。他に瓦類・曲物・種子・墨片なども出土した。

土器の年代から井戸の廃絶時期は10世紀前半とみられる。包含層から出土した遺物には緑釉陶器（21・22）、灰釉陶器（23）をはじめとする土器類・軒丸瓦・軒



第22図　出土土器（1～20　SE 04出土，21～23 包含層出土）

平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・文字瓦・三彩面戸瓦がある。
軒平瓦6732は新種である（第20図）。

第23図　出土軒平瓦

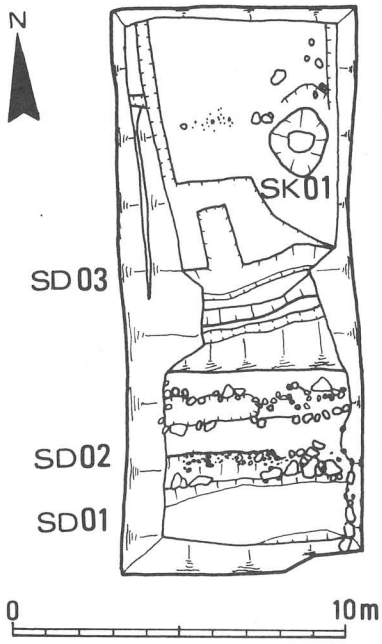
＜東大寺西南院について＞　今回の調査区は、江戸時代の『寺中寺外惣絵図』によると新禅院の東端にあたる。新禅院は鎌倉時代中頃（文永）の建立と伝えられるもので、それ以前がどの子院にあたっていたか不明である。同絵図では南大門西側の築地より南一帯を「西南院殿屋敷今ハ田畠」としている。西南院屋敷地はこの絵図では南面大垣より北へは及んでいない。ところが一方南大門をはさんで対称の位置にある東南院はやはり大部分畠になっているが、薬師堂一宇が描かれていてその敷地は南面大垣の内側に創立され、のちに大垣外にまで拡大したとみることができる。恐らく西南院も当初は大垣内に創立されたものと思われる。ちなみに『要録』・『続要録』によれば、西南院は鎮護国家のために天平神護年中に創立された古い格式の高い子院であるが、その後倒壊したままで年を経、弘長・文永頃に再建の運びになったという。ただこの再建記事は新禅院（新院）の創立記事と内容が重なり、しかも矛盾している。つまり新禅院の記事では西南院の旧地に建てたと記し、逆に西南院の記事では新院の旧地に建てたと記しているのである。

しかし遺構の年代観からみて今調査区は西南院の一部とみるのが最も妥当であろう。本来の西南院は築地内側にあり、のちに新禅院にその敷地を吸収されたのであろう。

④　東大寺境内の調査 2

本調査は東大寺が僧坊推定地に北接して建設する祭器庫予定地の事前調査である。調査にあたっては南北トレンチ（17× 6 m）を設定して発掘した。当該地は江戸時代初期の「東大寺寺中寺外惣絵図」にみられる塔頭金蔵院にあたる。

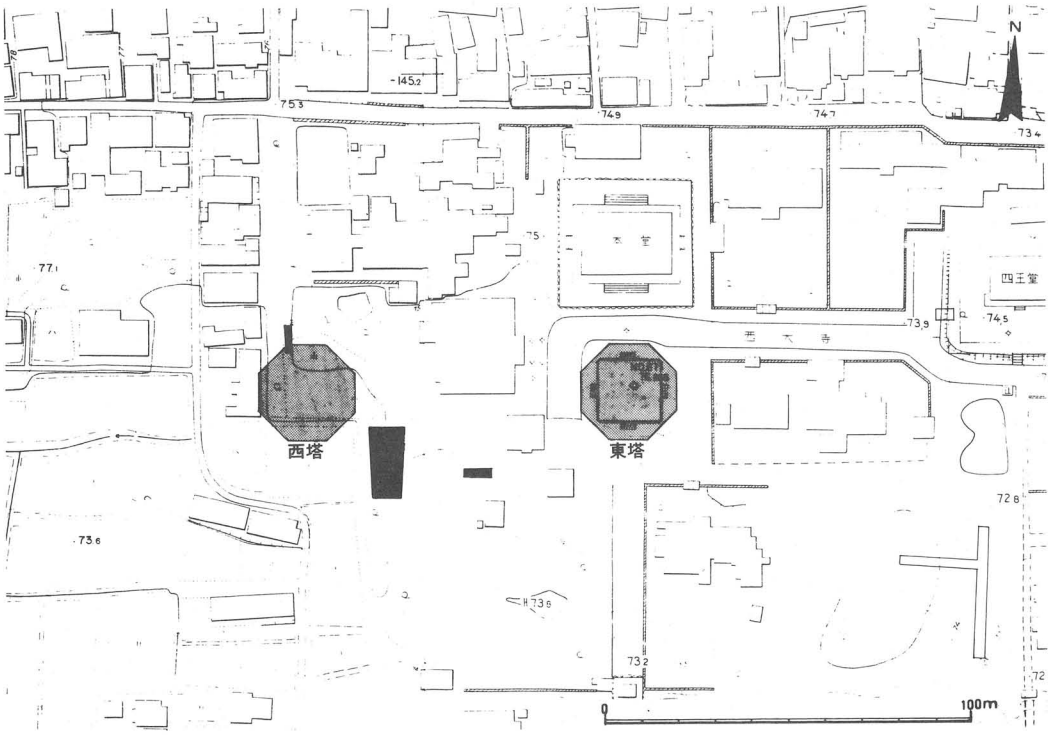
検出した遺構は石組の東西溝2条、旧河川1条、土坑1である。トレンチ南端で検出した石組東西溝（ＳＤ01）は幅約３m、深さ70cmの幹線水路とみられる。出土遺物から判断して鎌倉時代以降のものである。この溝を整地した後、その北側約 1.5



第24図　東大寺僧房北発掘遺構図

m に石組の南北溝（ＳＤ02）がつくられる。溝幅は約60cmで両岸に人頭大の自然石を列べる。近世の塔頭金蔵院に伴う遺構であろう。土坑（ＳＫ01）は南端の東西溝（ＳＤ01）と同時期である。旧河川（ＳＤ03）はトレンチのほぼ中央、厚い整地土（約２m）の下で検出した。この河川は東から西へ流れる。埋土中より多量の丸平瓦とともに東大寺創建軒瓦や土師器・須恵器・緑釉・白磁・瓦器などが出土した。

今回検出した遺構は、直接僧坊跡に関連するものではなかったが、僧坊の北限をトレンチ南端で検出した幹線の東西溝ＳＤ 01 以南 に求めることが可能となった。



第25図　西大寺発掘調査位置図　　■ 発掘区

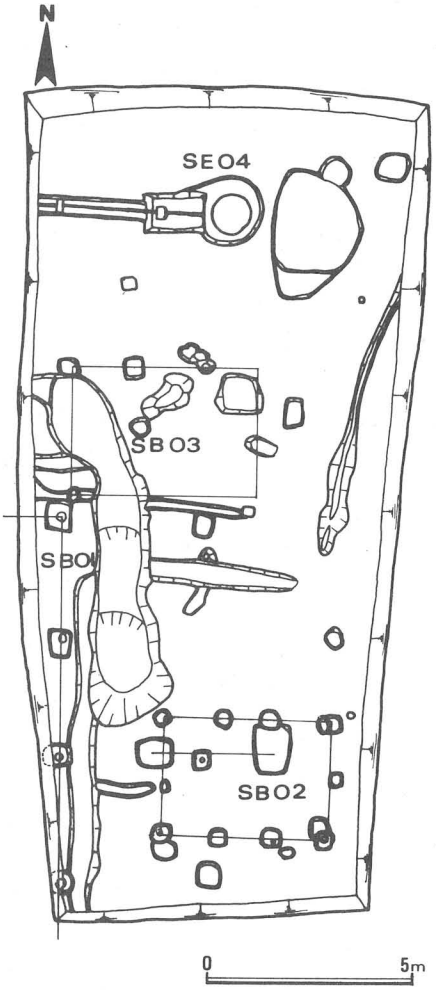
⑤　西大寺境内の調査

今回の調査は、現西大寺が西塔跡の南に接して信徒会館の建設を計画し、その事前調査として実施したものである。調査地は、信徒会館予定地と、この建設に伴って移動する護摩堂の予定地の２カ所である。なお、調査の過程で、基礎地盤の高さを確認するため西塔跡の一部を発掘した。

信徒会館予定地　調査以前の地形は、西塔の付近から現寺域の西南隅にかけてやや尾根状の高まりがある。調査によって、この地がかつて水田化していたこと、この尾根状の高まりは、近世以降に水田を埋立てた結果生じたものであることが判明した。東西約10ｍ、南北約20ｍの調査区で検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物３、掘立柱塀２、江戸から明治時代にかけての井戸跡と取水施設などである。

奈良時代の遺構　ａ・ｂの２期に分れる。ａ期　ＳＢ01は、南北棟建物の東側柱列にあたると考える。３間分を検出。柱間は３ｍ(10尺)等間。ＳＡ05は１間の掘立柱東西塀。柱間は３ｍ（10尺）である。ｂ期　ＳＢ02・03は、小さな柱掘形の３間×２間の東西棟建物。後世の削平のため、柱穴の底の一部がわずかに残る程度である。ＳＢ02の柱間は、桁行方向が1.3ｍ等間、梁間は1.5ｍ等間。ＳＢ03の柱間は桁行・梁間とも1.5ｍ等間に復原できる。

近世以降の遺構　層位と遺物からみて、中世以降この地は水田化していた。井戸ＳＥ04と取水施設は、この水田を埋立てた後に設けられている。ＳＥ04は、竹のタガをまわした樋を井戸枠に使用。竹のタガのみが遺存していた。取水



第26図　西大寺発掘遺構図

施設は、竹を導水管とし、木の継手で接続し、井戸底に水を導く。これらの施設は、幕末から明治にかけて、この地にあった三光院に付随したものであろう。

護摩堂移転予定地　東西7.5ｍ、南北2ｍの発掘区を設けた。ここには水田の痕跡はなく、地山層まで瓦を多量に含んだ0.8～0.9ｍの厚さの包含層があったが、顕著な遺構は検出できなかった。

西塔跡　1955年の調査区に接して、南北7ｍ、東西2ｍの発掘区を設けた。ここは近世の瓦溜によって大きく撹乱され、ごく一部で基壇土の一部を検出したのにとどまる。この調査区の地山層の上面と信徒会館予定におけるそれとの比高差は、約0.8ｍである。

まとめ　調査地は、平城京右京1条3坊11坪にあたる。信徒会館予定地で検出したのは、この西大寺創建以前の宅地遺構である。調査面積が小さかったこともあり、遺構の全体配置は確認するに至らなかった。

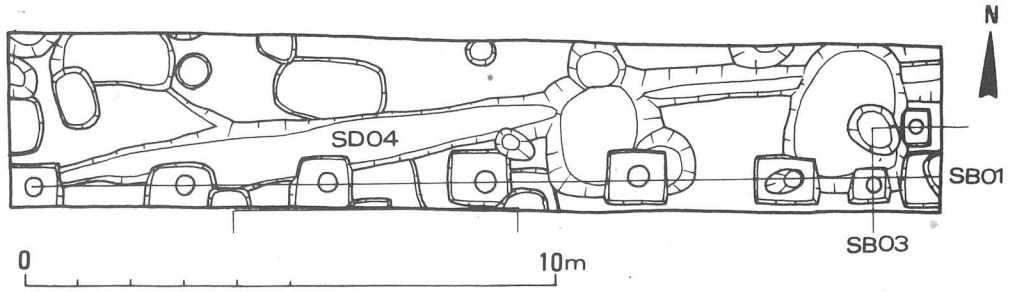
⑥　法華寺境内の調査（第118－9次）

法華寺横笛堂の移転にともなう事前調査として、鐘楼の東南約40ｍの畑地に東西約18ｍ、南北約3ｍのトレンチを入れた。

土層は地表から約50㎝が置土・耕土で、以下、中世の遺物を含む茶褐粘質土及び灰褐砂質土が20～30㎝あり、その下が黄褐粘質土の地山となる。

検出した遺構は、掘立柱建物あるいは柵1（ＳＢ01あるいはＳＡ01）、掘立柱建物2（ＳＢ03）、溝1（ＳＤ04）、土坑多数である。

ＳＢ01（ＳＡ01）は、東西棟建物の側柱列ないしは東西柵と考えられ、6間分



第27図　法華寺発掘遺構図

（9.5尺等間）を検出した。柱痕跡から8世紀前半の土師器と平城宮第Ⅲ期の軒丸瓦6282型式Ｇ、柱抜取穴から第Ⅳ期の軒丸瓦6138型式Ｂが出土しており、上限を8世紀中頃に置くことができる。法華寺に関係するものと考えられる。ちなみに、柱列は法華寺講堂の南入側柱列にほぼあう。また、西端の柱穴は伽藍中軸線から約180尺東に位置する。ＳＢ02はＳＢ01（ＳＡ01）より新しい。南北棟建物の北妻と考えられる。東西2間（9尺等間）。ＳＢ03は小規模な建物で、その北西隅を検出したにとどまる。東西1間分（3尺）、南北1間分（4尺）。ＳＢ02・03はＳＢ01(ＳＡ01)の廃絶後に建てられた雑舎風の建物で、平安時代に属そう。

溝・土坑は中・近世に属す。このうちＳＤ04は、幅1.2～0.6ｍ、深さ0.3ｍ前後で、北東から南西に斜行する。

遺物は主として土坑から中・近世の瓦が多量に出土したが、他に緑釉土器片・円面硯各1及び7世紀末～8世紀前半の軒瓦数点が出土した。

⑦　**法華寺阿弥陀浄土院の調査**（第118－30次）

この調査は、公立学校共済組合春日野荘外周工事の事前調査として行なった。調査地区は法華寺阿弥陀浄土院の西北の隅にあたる。外周工事の計画にそって逆Ｌ字形にトレンチを入れて調査を進めた。今回の調査地区の東南は昭和48年に第80次調査として960㎡にわたって調査を行なっている。したがって今回の調査は第80次調査の補足的意味をもっている。

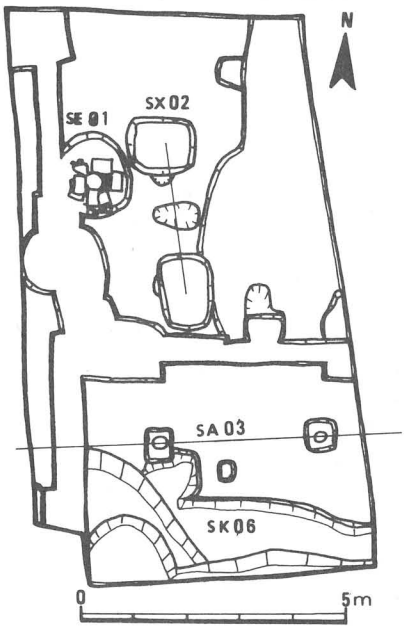
調査の結果、東西大溝ＳＤ845・南北溝ＳＤ840・暗渠（木樋）2条・井戸1基を検出した。ＳＤ845とＳＤ840は、第80次調査でも検出しており、阿弥陀浄土院の北と南の内側をかぎる位置にあるが、ＳＤ845からは開さくの時期を示す遺物は出土していない。ＳＤ840からは平安時代以後の遺物は出土せず、奈良末に埋ったものと思われる。この南北溝ＳＤ845に浄土院の西築地をくぐって流れこむ木樋を検出した。木樋は6枚板の組合せの、外径40㎝のものと、くりぬきの蓋をもつ外幅20㎝のものとが接合されていた。出土遺物は、木樋の中から木簡1点、ＳＤ845から奈良時代から鎌倉時代までの瓦が若干出土している。

⑧　法隆寺境内の調査１

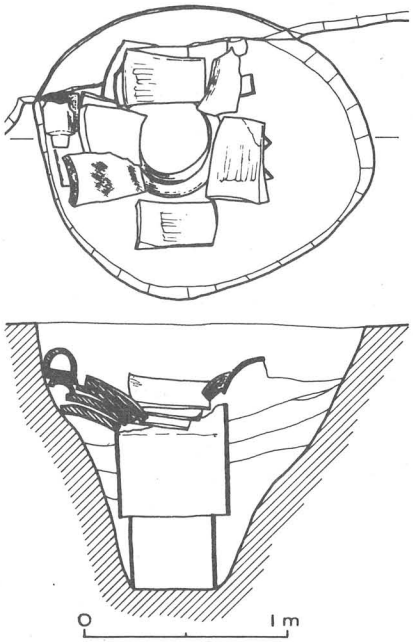
調査地は、東院伽藍の伝法堂の西南約15ｍ、東院の西の築地塀に接する位置にあたる。発掘は、現法隆寺がこの位置に小規模な門を新営することになり、その事前調査として、奈良国立文化財研究所と県立橿原考古学研究所が共同で行った。東院伽藍の下層からは、1934年に始まった修理工事によって斑鳩宮跡と推定される大規模な掘立柱建物が発見されている。今回の調査地点は、斑鳩宮に関連した遺構の存在が予想されるところである。調査は、門の予定地を東西5.5ｍ、南北11ｍの範囲で行った。発掘区の層位は、現表土の下に中世の瓦・土器を含む暗褐色土層、奈良時代から平安時代初期の瓦を含む灰青色砂質土層、青灰褐色砂層、褐色粘土層、黒色粘土層へと移行する。検出遺構は、奈良時代以前の柱掘形、平安時代初期の井戸と掘立柱塀、中世の土坑、近世の溝などがある。

奈良時代以前の遺構　ＳＸ02は約1.2×1ｍの掘形である。検出層位とＳＸ02の軸線が現東院伽藍の軸線よりも西偏することから、この時期の遺構と考える。柱痕跡は検出できなかった。

平安時代の遺構　井戸ＳＥ01と掘立柱東西塀ＳＡ03がある。ＳＥ01は、掘形が



第28図　法隆寺東院発掘遺構図

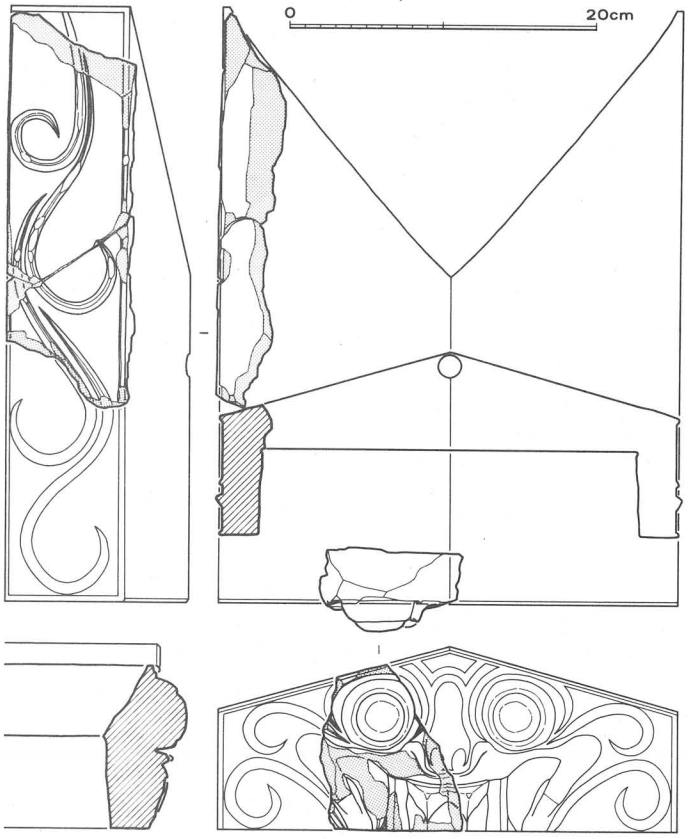


第29図　法隆寺東院井戸発掘遺構図

1.5 × 1.3 mの小さな井戸で、井戸枠に直径0.55m × 0.43mの曲物を2段にいれ、井戸枠を四角く囲むように上部に軒平瓦を平積みにしている。軒平瓦は側辺を中央に向け、凸面を上にし、顎当部分と端面が交互にかみ合うようにして各辺4～5枚程度積んでいる。使用している軒平瓦は、6691型式と、山字形の中心飾をもつ均整唐草文である。井戸の内部からは、瓦片とともに隅木蓋瓦の破片が出土した。東西塀ＳＡ03は、1間分を検出。柱間は3m（10尺）である。柱掘形の内部には、瓦片や羽釜の破片が入っていた。

中世の遺構　不整形の土坑ＳＫ06がある。暗褐色の埋土に瓦や土器片を含んでいる。

隅木蓋瓦の復原　出土した資料は前面と側面の破片であるが、復原を試みた。本例は、前面に鬼面文を飾り、側面に唐草文を表現している。蓋部上面を山形に作るが、下面は平坦なようである。茅負の隅角に嵌めこむための三角形の刳りがある。現存部の切りこみからすると、隅角を鋭角・鈍角いずれにも復原可能である。前者は真角の建物に、後者は八角円堂への用途を推定できる。確実な寸法は側面の高さ（7.8㎝）と正面の一部の高さのみであるが、幅30㎝、長さ39㎝に復原できる。時代は、文様の特徴からみて、平安初期に推定できる。



第30図　法隆寺東院出土隅木蓋瓦

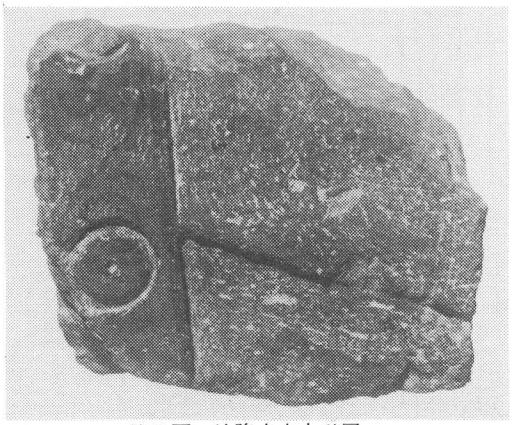
⑨　法隆寺境内の調査２

防災工事に伴う調査である。奈良県教育委員会との共同調査。今年度は、伽藍裏山の通称梵天山の貯水槽建設予定地、西院伽藍において上御堂と地蔵堂の周辺を発掘した。

梵天山地区　当初の貯水槽建設予定地は、調査前の踏査によって古墳数基を確認したため、梵天山から南に下がった支丘鞍部の平坦地に変更した。ここに南北トレンチ（36×２ｍ）と、これに直交する２本の東面トレンチ（10×２ｍ）を設け、一部を拡張した。検出遺構は、平行する２条の礫敷溝である。南北18ｍ余を検出。溝相互の距離は約1.4ｍ、溝幅は約0.5ｍ。近世の通路の側溝であろう。

上御堂地区　上御堂西北部に鍵手状にトレンチ（長さ約30ｍ、幅３～４ｍ）を設けた。表土下に中・近世の整地土が２～３層あり、この下が青灰色粘土を主体とした地山となる。検出した遺構は、溝５条と土坑多数であるが、ほとんどが中・近世に属す。北端で検出した東西溝（幅0.5ｍ以上）は、中世以前に遡る可能性がある。位置的には西院伽藍の北辺を限る施設に伴うものと考えられる。遺物として、飛鳥時代の軒丸瓦が３型式３点出土したのが注目される。窯壁とみられるものが出土しているので、あるいは付近に瓦窯があったかもしれない。今後の調査が期待される。

地蔵堂地区　東西トレンチ（36×３ｍ）とこれに直交する南北トレンチ２本（10×1.5、17×３ｍ）を設けた。検出遺構は、東西・南北に直交する２条の溝、築地の基礎石組１、石列４条、土坑などである。東西溝は瓦を多量に含み、飛鳥時代・奈良時代の軒瓦が出土した。この２条が奈良平安時代の溝である以外は、江戸時代以降の遺構である。土坑中から、縦帯に唐草文を墨書した鴟尾片が出土した。かつて大講堂の周辺で出土した鴟尾片と同一個体の可能性が強い。



第31図　法隆寺出土鴟尾